

# 皮のない虎

——一九九九年の『小説』

大島 行雲

倉木芳恵が芥川賞を受賞した。

史上最年少、女子高生の受賞だった。

黒石敦也は既に三十を過ぎていた。

未だ賞と言えるほどの賞を取った事はなかった。

公園のベンチで週刊誌を見ながら、彼は悲しくなった。自分が情けなくなった。

週刊誌の白黒写真は、一見するとアイドルの通学風景でも盗撮した様な俗っぽさだ。若々しく輝いた笑顔の三人の少女が、制服に身を包んで道を歩いている、そんなどこにもある場面だが、その真ん中において、ブラウスの襟を少し大きめに広げた髪の高い少女が、彼など及びもつかない芥川賞作家なのだとはいふ。嘘みたいな話だと思っ。しかし、現実だ。黒石から見れば実に一回り以上も年下の青二才の筈の倉木芳恵は世間に認められる実力を持った作家で、彼は無名の三文作家だった。いや、三文でさえ稼げない名ばかりの作家だ。いつも職業を聞かれる度に彼は答えに窮する。ペン一本で食べているとは到底言えない生活だ。

いい生活だ。

俺は作家なのか。作家と言えるのか。

そんな事に悩む黒石を嘲笑う様に、倉木芳恵は高校生の身分を持ちながら、既に作家と名乗って恥ずかしくない実績を手に入れている。ミニスカートの女子高生が。

思わず溜息が零れる。

ベンチの背凭れに倒れ、また長く深い溜息をつく。

勿論、倉木芳恵は何も悪くない。悪いのは自分だ。自分の無能さが悪いのだ。倉木芳恵が芥川賞を受賞した作品『あさって』を最初に文芸雑誌で読んだ時、彼は素直に「いいなあ」と思った。あの時は、作者が女子高生だとは知らなかった。知った後でも、それを理由に掌返して否定するほど、そこまで黒石も了見は狭くない。

自分自身は碌な作品が書けぬまま、この年齢になってしまっただが、他人の作品の良し悪しを判断する力には自信があった。倉木芳恵の作品は芥川賞を取ったから秀作なのではなく、秀作だから芥川賞を取ったと言える作品だ。最近の受賞作が時代の先端を行く素振りや奇を衒っただけの芸術家気取りな事を思えば、倉木芳恵の受賞は文学的良心への回帰であり、それ自体は黒石にとって歓迎すべき事件だった。

倉木芳恵が女子高生でさえなければ。

黒石はベンチから立ち上がった。

嫉妬している。そんな自分が厭になった。

名誉欲で小説を書き始めた訳でもなければ、書き続けている訳でもない。だが、どんなに書いても何一つ認められない状況は、まるで世間に自分が作家である事を否定されている様で、自分の作品が存在しないかの如く扱われている様で堪らなかつた。

手にした週刊誌をごみ箱に捨て、呪縛から逃れて自分らしさを取り戻したかったが、市の方針で公園からごみ箱は撤去されていた。呪縛の源は家まで持ち帰るか、途中のコンビニのごみ箱で捨てるかしかない。それとも公園の植え込みにポイ捨てでもするか。

周りを見回せば、他には誰もいない。

そこで、黒石は気づいた。

頭の片隅に残っている倫理にはない。植え込みの影で香箱を作って蹲っている一匹の猫に。興味深げに、それとも、不審げに自分を見上げている白い猫だった。

一瞬、黒石は今までの思考を忘れて中腰になると、猫を手招きする。ゆっくりと忍者の様な足取りで白い猫は彼の足下に近づいてきた。そのまま彼の股下を潜り抜け、右足に纏わりつく様にして一回りする。笑みを漏らして黒石は片膝を着いた。

白い猫は男を翻弄する女の様さに彼に背を向け、公園の池の方を見ていた。柔らかな尻尾は彼に向かって鎌首を擡げ、美

しい曲線を描いた尻は締まっている。愛しげに黒石は、彼女の背中を愛撫した。再び彼の方を見て、彼の太ももにお手をする様に片手で触れた。微かに爪の感触がズボンを通して伝わってくる。

儂げに小さな手は、運動不足の彼の握力でも握りつぶせそうなほどだ。黒石は旧友の子どもを思い出す。先日、初めての子どもが誕生した彼の家に招かれ、まだ一歳にも満たない子どもと相手をした。最初は見知らぬ他人の闖入に怯えていた子は、暫くすると馴れてきたのか、彼の周りを這って歩き回り、そして今、目の前にいる猫と同様に、彼の太ももに片手で触れた。同様に儂げで脆く、それ故、愛しかった。

学生時代からの旧友は、かつて一緒に小説を書き、同人誌を発行した仲だった。当時、随分と文学論めいた議論を交わしてきたが、卒業を機に彼は筆を捨てた。作家で食べていくなんで非現実的だと言って普通に会社に就職し、普通に恋愛をし、普通に結婚し、普通に子どもを持ち、極々普通に山手線の如く無難に日々の営みを繰り返す人生を送っている。それを悪いとは思わない。それどころか最近では、頻りに羨ましくさえある。

自分には子どもはおるか、妻もいない。三十を過ぎても売れない小説を書く事に人生を費やしてフリーターの様な生活をしている彼にとって、幸福な家庭生活など作品の中にしか存在し得ない。自分の立場は余りに不安定で、昔ほど将来に自信を

持つ事もできない。街角でナンパをする年齢は疾うに過ぎていたし、金で女を買うほど愚かでもない。

結局、今の彼には作品を書く事しかなかった。

消極的だ。消去法の人生。そんなものは芸術じゃない。

売れない作品、それどころか誰にも認識されない作品を書いて。批評家に酷評されるなら、まだましだ。彼は、その段階にさえ滅多に辿り着けない。堪らない無力感に打ち拉がれる。

倉木芳恵は、信じられないくらい瑞々しい肌で美しく、そこに文学的才能まで加わって、彼の持たないものを全て持っている。一方の彼ときたら、いつまでもうだつが上がらずに女にも逃げられた。彼の才能を認める者など家族くらいしかいない。つまり、いないのと同じ事だ。親に褒められて、その気になる芸術家など愚か者以外の何者でもない。

猫は彼に飽きたのか、再び植え込みの方へと戻った。

まるで自分の人生を見ているかの様に、唇の片隅で自嘲気味

に弱々しく笑い、黒石は猫を見送って手を振った。

「バイバイ」

猫は振り向かない。そんな事を黒石も期待してない。彼から去っていった女も振り向かなかった。編集者は言うまでもない。

黒石は家路に着いた。

どちらにしろ、食って寝る生活からは、どうしたって逃れられない。

教室の窓辺に凭れ、一人の少女が本の頁を繰っている。薄い小冊子だ。同じ所の数頁を何度も眺めている。ぴゅうつと吹き込んだ風が、少女の黒髪と教室の薄汚れたカーテンを靡かせた。「寒いから、閉めてよ」

背後からの声に「ごめん」と少女は呟き、はためくカーテンを挟まないように気をつけながら窓を閉めた。持っていた本を机に置き、少し乱れた髪形を両手で直す。

「ねえ、りさ、この本、どうしたの？」

「あ、それ？ うちのお母さん、地元の文芸サークル？ みたいの入っててさあ、そのの」

「ふうん」

「読んでって渡されたんだけどさあ、なんかあ、あんまおもしろくないって言うかあ、よくわかんないんだよねえ」

少女は再び本の頁を繰り始める。

「でもさあ、芳恵なんかを読んだら、もうド素人！ って感じでバカみたいじゃない？」

「え、そんな事ないよあ……」

先程、窓辺で眺めていた頁を見つけ、芳恵は手を止める。

……いつか、こんな書けるようになるかな……

頁の右上には、大きめの太文字で書かれていた。

『溪山にて明月に対し 黒石敦也』